

重要文化財 安楽寺多宝小塔の歴史

たほうしょうとう

多宝塔とは、一重が方形（正方形など）、二重が円形の平面形で、一・二重ともに四角い屋根をかける二重の塔のことです。また多宝小塔とは、屋内に安置されている多宝塔を指します。多宝小塔は、全国で10基しかない珍しいものですが、その中でも国の重要文化財建造物に指定されているのは安楽寺のものが全国で唯一であり、大変貴重です。

安楽寺多宝小塔は、建てられてから約600年の歳月がたち、部材の欠損や破損、ずれやゆがみが生じ、大きな地震などが起これば倒壊する危険性があったため、昨年の11月から保存修理を実施してきました。

安楽寺多宝小塔は、これまで詳しいことが判明しておらず、今回の修理によって建物の年代や由来を示す墨書などの発見が期待されましたが、確認できませんでした。しかし、多宝小塔を詳しく調査した結果、これまでの修理や改変の様子、建築された当初の姿などその歴史を明らかにすることができました。現在の一重は、正面のみに扉がありますが、当初は四面全てに扉があり、扉の両

脇には連子窓れんじまどと呼ばれる窓が存在するなど一般の多宝塔と共通する意匠であることが判明しました。また建物の内部も一般の多宝塔とほとんど変わらないほど精巧に、製作技法も同じ手法によっているなど高度な技術を持った大工が関わっていたことが明らかになりました。

今回の修理で明らかになった成果や安楽寺の文化財を解説する歴史講演会を開催します。講演会終了後には、修理現場の公開も行いますのでご参加ください。

歴史講演会「安楽寺の文化遺産と多宝小塔」
講演日時／10月1日（土）13時30分～16時
会場／鳥屋城公民館



保存修理前の安楽寺多宝小塔



建物内部の様子